様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　6 月 16 日現在

機関番号：24302
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009～2010
課題番号：21720264
研究課題名（和文）六世紀末・七世紀の東アジア情勢と高句麗の対倭外交

研究課題名（英文）　The East Asian situation and Koguryo's diplomacy toward Wa from the end of 6th century to the mid-7th century.

研究代表者
井上　直樹　（INOUE NAOKI）
研究者番号：80381929

研究成果の概要（和文）：
本研究は、6 世紀末から 7 世紀初の高句麗の対倭外交について、隋・唐、百済・新羅、倭の動向と関連づけて総合的に分析し、当該期の高句麗の対外政策のなかに位置づけ、その意義を追求したものである。
従来、高句麗の対倭外交は、隋・唐との対立を直接的な原因として展開されたと考えられてきたが、研究の結果、高句麗の対倭外交は、隋・唐との対立を前提としつつも、直接的には朝鮮半島における高句麗の対新羅戦略と深く関わって展開したことを明らかにし、古代東アジア諸情勢理解に新たな視点を提示した。

研究成果の概要（英文）：
This study is associated about diplomacy of Koguryo(高句麗) to Wa(倭) with a trend of Sui(隋), Tang(唐), Silla(新羅), Baeje(百済)　and Wa at the beginning of 7th century from the end of 6th century that analyzed it generally and examined the significance.
Opposition with Koguryo and Sui, Tang has been regarded as Koguryo diplomatic direct cause to Wa, until now. However, as a result of study, it was revealed that the diplomacy of Koguryo to Wa associated with the Koguryo policy in the Korean Peninsula to Silla deeply.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
H21 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
H22 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：東アジア　朝鮮古代史　高句麗　倭　古代東アジア　朝鮮半島

１．研究開始当初の背景

紀元前 1 世紀に鴨緑江中流域から興起した高句麗は、668 年、唐・新羅の連合軍の攻撃によって滅亡する。約 700 年に及ぶその歴史の中で、その領域は中華人民共和国(以下、中国とする)、朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮とする)、大韓民国(以下、韓国とする)にまで及び、それだけに高句麗の史的展開過程の解明は、高句麗史それ自体のみならず、それと敵対・同盟関係にあった朝鮮半島の百

済・新羅は当然のこと、さらにそれら諸国と密接な関係を有し、大きな影響力を与えた倭、また高句麗西方に位置し、その滅亡過程に直接的に関わった中国王朝の歴史を解明するためにもきわめて重要で、そのためこれまで研究が進められてきた。

特に高句麗と倭の関係については、『広開土王碑』や高句麗と対立した倭の五王の対外関係とかかわって積極的に考究されてきた。しかし、それらの多くは 4・5 世紀代の高句麗と倭の関係について考究したものであり、その後の 6・7 世紀の高句麗と倭の関係については、4・5 世紀のそれと較べて必ずしも盛んであるとは言い難い状況であった。しかも、それらの研究の多くは倭の対外関係と関わって論究されたものであるため、必ずしも高句麗の立場から高句麗の対外政策を総合的に考察したものではなかった。また、高句麗の立場から論究されたものであっても、隋・唐との関係が重視される傾向にあった。そのため、そのため、改めて、6・7 世紀の高句麗・倭関係を、当該期の高句麗を取り巻く状況と関連させながら、高句麗の視点から追求していくことも必要であると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、これまでもっぱら倭の立場から追求されてきた高句麗の対倭外交を、当該期の高句麗を取り巻く状況をふまえ、さらに高句麗の対倭外交を高句麗全体の対外関係のなかに位置づけながら、その史的意義を考究することある。そして、そのことは同時に、(1) 当該期の高句麗外交それ自体を明らかにし、既往の研究とは異なる高句麗史像を提示すること、(2) 高句麗をも包括した古代東アジア世界の史的展開過程の一端を明らかにし、古代の東アジア情勢に新たな視点を提示すること、(3) これまで「一国史」的枠組みで論じられている高句麗史理解に対して、広域な歴史的視座を提供することをも目的とするものである。

３．研究の方法

本研究では、6 世紀末・7 世紀の高句麗の対倭外交を、当該期の東アジア世界における高句麗を取り巻く状況に留意しつつ、高句麗の視点から解明するが、その際、高句麗の遣使記事に注目した。すなわち高句麗から使者が派遣されたことを示す遣使記事が空白であれば高句麗と派遣先国との関係は親密であるとはいいがたく、頻繁ならば高句麗と派遣先国との関係は親密であり、その背後には何らかの事情が存在したと想定でき、高句麗と周辺諸国との関係を理解する上で、遣使記事は一つの指標となると考えられるからである。

こうした点をふまえ、まず第一に高句麗と倭の関係についての基本的な史料である『日本書紀』の高句麗関係記事を整理し、その史料考証を行った。

第二に、高句麗の対倭外交を東アジア世界における高句麗の対外政策と関連づけるため、高句麗の対中国王朝、対百済・新羅遣使記事についても検討を加え、データベース化し、六世紀末・七世紀における高句麗外交の特徴を探った。

第三に、高句麗の対外政策を東アジア世界の史的展開過程のなかに位置づけて論究するため、倭はもちろんのこと、高句麗・倭関係にも大きな影響を与えたと考えられる百済・新羅、中国王朝の遣使記事について検討を加え、データベース化し、中国王朝・百済・新羅・倭の六世紀末・七世紀の外交的特徴を探った。

そして、これまで整理してきた資料にもとづいて六世紀末・七世紀の高句麗の対倭外交を、中国王朝・百済・新羅・倭国の内政的・外政的動向と関連づけて総合的に分析し、当該期の高句麗の対外政策の中に位置づけ、東アジアという国際的な視野から追究し、その意義・特徴を明らかにした。。

４．研究成果

上述の研究方法によって得られた、6 世紀末から 7 世紀の高句麗の対倭外交の特徴は以下のとおりである。

(1) 590 年代の高句麗の対倭外交

595 年、高句麗からは約 20 年ぶりに僧侶慧慈が倭に派遣される。それ以前、高句麗は隋に対して積極的に使者を派遣しているが、585 年以後は積極的な遣使記事は認められない。このことから、高句麗と隋との関係は悪化したと推定され、慧慈の派遣はまさにこの時期にあたることから、慧慈の来倭は隋との関係悪化によるものと理解される。ただし、慧慈の派遣以後、高句麗から倭への使者派遣はしばらくみられない。

(2) 600 年代初の高句麗の対倭外交

慧慈の来倭後、高句麗と倭関係を示すものとして注目されたのが、601 年の大伴連囓の高句麗派遣記事である。従来、これによって高句麗と百済が同盟関係に入ったとする見解や記事そのものを後世の造作とする見解があったが、大伴連囓の派遣以後、慧慈以降、しばらくみられなくなっていた高句麗から倭への僧侶派遣などが再開していることから、高句麗は倭の対新羅戦略に同調し、倭との結びつきを強める外交をこの頃展開したと考えられる。

(3) 7 世紀初の朝鮮半島情勢と高句麗の対倭外交

一方、この時期、高句麗は倭だけでなく、百済とも同盟関係にあったとみる見解が提示されていたが、それは中国系史料にしか存

在せず、朝鮮系史料にはそれとは逆に高句麗と百済の交戦記事などが認められることなどから、高句麗と百済は敵対関係にあったと考えられる。また、対新羅関係であるが、倭との関係を深めた後、高句麗は対新羅軍事行動に転じており、この時期、高句麗の対倭外交は対新羅軍事行動とセットで展開されていた。一方、この時期、隋の高句麗遠征が行われているが、高句麗から隋への使節派遣は認められず、この時期の高句麗の対倭外交が直接的には対新羅戦略と関わって行われたと考えられる。

(4) 唐建国初期の高句麗の対外関係と対倭外交

隋の滅亡後、高句麗は倭に使節を派遣して、隋との交戦で得られた戦利品を献上し、倭国内における高句麗の位相を高めようとするが、高句麗の対倭外交はその後しばらく認められなくなる。高句麗から倭へ使者が派遣されたのは、新羅が「任那の調」を貢上するなど、積極的な対倭外交を展開した後であった。だが、この場合も、新羅の対倭外交が低調となると高句麗の対倭外交も低調となっていった。それに対して、高句麗の対唐外交は積極的に展開される。その後、前回の使節派遣から七年ぶりに高句麗から倭への使者派遣が認められるが、この時期、高句麗は新羅と交戦しており、それと関わって倭との結びつきを強め、新羅を牽制しようとしたと考えられる。

(5) 630・640 年代初の高句麗の対外関係

この時期、高句麗から倭への使節派遣は認められず、高句麗は対唐外交を中心に展開する。しかし、積極的に遣使が派遣されたのではなく、高句麗は唐の軍事的侵攻を恐れ、千里長城を造営するなど、対唐強硬外交を展開し、その間、631 年から 639 年までの八年間、高句麗の唐への遣使は認められない。だが、高句麗は、唐が高昌を滅亡させたことをふまえ、従来の外交姿勢を改め、唐へ使者を派遣するようになる。

(6) 642～668 年までの高句麗の対倭外交

その後、高句麗では 642 年に泉蓋蘇文のクーデターが起こり、対唐強硬外交を展開し、唐との対立が深まっていき、唐・太宗の高句麗遠征が断行される。だが、この時期、高句麗からの対倭外交は展開されない。そのころ、高句麗と敵対する新羅は、高句麗と同盟関係にあった百済としきりに交戦しており、百済との同盟による対倭外交の位相の相対的な低下が、消極的な高句麗の対倭外交の原因と考えられる。だが、新羅が倭との関係を深めるため、「質」を派遣するようになると、高句麗も積極的に対倭外交を展開するようになる。

さらに、660 年に百済が唐・新羅連合軍によって滅亡すると、新羅を牽制するためにも、高句麗の対倭外交の比重は高まっていき、高句麗は積極的な対倭外交を展開する。この時期になると、従前とは異なって、高句麗は倭の軍事的援助を求めるようになる。高句麗末期には同年に二度も使節を派遣するなど、積極的な対倭外交を展開するが、やがて高句麗は 668 年に唐･新羅連合軍によって滅ぼされ、高句麗の対倭外交は終焉を迎える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

①井上直樹、「7 世紀前半新羅の対倭外交」『2010 年 新羅学国際学術大会論文集(7 世紀東亜細亜의 新羅)』第四輯、慶州市・新羅文化遺産研究院、2011 年、査読無、韓国語 155―184 頁　日本語 185―207 頁

②井上直樹、「戦後日本の朝鮮古代史研究と末松保和・旗田巍」『朝鮮史研究会論文集』48、査読有、2010 年、25―57 頁

③井上直樹、「백제・고구려 유민과 왜・일본(百済・高句麗遺民と倭・日本)」東北亜歴史財団編『고대 환동해교류사(古代環日本海交流史)』(1 部　고구려와 왜(高句麗と倭))、2010 年、査読無、125―147 頁

④井上直樹、「韓国・日本の歴史教科書の古代史記述―問題点とその変遷―」『第二期日韓歴史共同研究報告書　教科書小グループ篇』日韓歴史共同委員会、査読無、2010 年、411―437 頁

⑤井上直樹、「八世紀中葉の新羅・唐関係―孝成王代を中心に―」『唐代史研究』第 12 号、査読無、2009 年、4―26 頁

⑥井上直樹、「朝鮮三国の金石文」、高田時雄編『漢字文化三千年』臨川書店、査読無、2009 年、29―55 頁⑦

〔学会発表〕（計 4 件）

①井上直樹、「6 世紀末・7 世紀の東アジア情勢と高句麗の対倭外交」九州史学会大会、2010 年 12 月 12 日　於九州大学

②井上直樹、「7 世紀前半の新羅の対倭外交」第 4 回新羅学国際学術大会　2010 年 10 月 29 日　於大韓民国慶州市

③井上直樹、Research on the History of Koguryo and “National History” Association for Asian Studies Annual Meeting 2010 Who Owns the Past? View on the koguryo History Dispute in East Asia Philadelphia U.S.A 2010 年 3 月 25-28 日

④井上直樹、「戦後日本の朝鮮古代史研究と末松保和・旗田巍」第 46 回　朝鮮史研究会

大会　―創立 50 周年記念大会―　統一テーマ；戦後日本の朝鮮史学を振り返る
2009 年 10 月 17・18 日　於東京経済大学

〔図書〕（計 0 件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
井上　直樹（INOUE　NAOKI）
京都府立大学・文学部・歴史学科・准教授

研究者番号：80381929

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：